

【vol.28.5】『コード・トーン』と『ノンコード・トーン』、そして『アヴォイド・ノート』

こんにちは、大沼です。

前回、前々回と、基本的なインターバルの位置と名前を覚えたところで、今回は、新しい用語を少し解説しておこうと思います。

その新しい用語とは、タイトルにもある通り、『コード・トーン(chord tone)』と『ノンコード・トーン(nonchord tone)』、『アヴォイド・ノート(avoid note)』というもの。

この3つの用語の内、『コード・トーン』と『ノンコード・トーン』については、そんなに小難しい解説は要りません。

もう、ほぼ文字通りの意味です。

『コード・トーン』の単語の意味を調べてみると、『コード(和音)の、トーン(音、音調)』、即ち、この文脈では、『そのコードの構成音』の事。

『ノンコード・トーン』は、『そのコードのコード・トーン以外の音』の事。

そのまんまですね。

(※「tone」を「音」と訳すのは少し狭義的すぎる気もしますが、この文脈では、こうしておくのが分かりやすいと思います)

ちなみに『ノンコード・トーン』は日本語としては『非和声音(ひわせいおん)』とか、『和声外音(わせいがいおん)』とか呼ばれたりします。

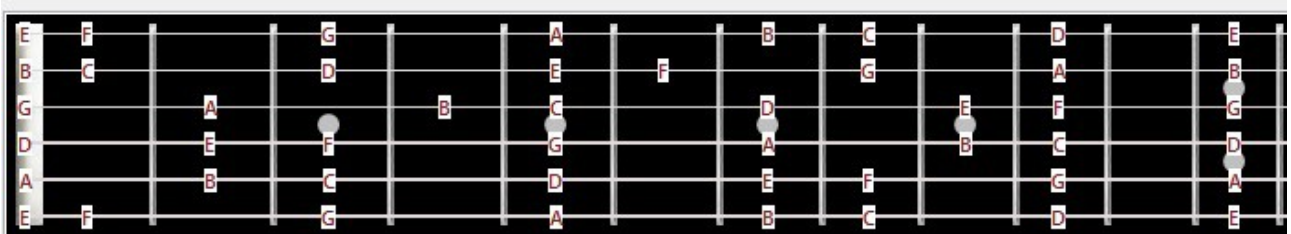
さて、「コード・トーン」はそのまま「そのコードの構成音」のことなので、比較的わかりやすいのですが、少し考えなくてはならないのが「ノンコード・トーン」の方です。

「そのコードのコード・トーン以外の音」と言われれば、まさにその通りなんですが、実際にそれらの音を楽曲の中で使おうとする場合、大きく2つのパターンを考える必要があります。

まず1つ目ですが、以前お話ししましたが、楽曲で主に使われるコードは、その曲のkeyの基準となるスケールから成り立っていますね？

key=Cならば、Cメジャースケールの7音から、その曲で主に使われる各コード(ダイアトニックコード)が出来ているわけです。

※Cメジャースケール全体図

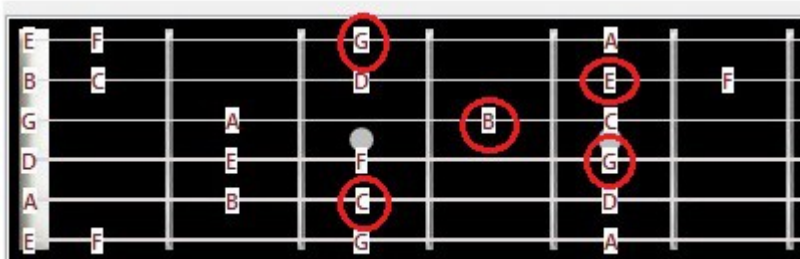


で、例えばCメジャースケールの構成音上に来る、CM7のコードならば、C、E、G、Bがコード・トーンで、残りのD、F、Aがノンコード・トーンになりますよね。

※key=Cの楽曲でCメジャースケール上に構成されるCM7の場合

赤丸で囲った音(C、E、G、B音)がCM7のコード・トーン
(※赤丸で囲っていないそれらの音もコード・トーン)

それ以外の音(D、F、A音)がノンコード・トーン



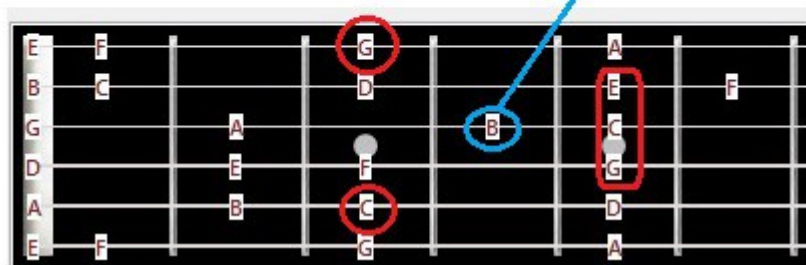
ここで1つ、気を付けなければいけない事があるのですが、例えば、CM7の様な4和音(七の和音)であれば、コード・トーンとノンコード・トーンの種類は簡単です。

ですが楽曲の中で「C」の様な、純粋なトライアドが指定されている場合、7th音(M or m)をどう扱うか(そのトライアドの上で7度を鳴らせるのか)?という部分は、結構、デリケートな問題になってきます。

トライアドと7th系のコードでは響きが全然違うので、トライアドにしておくべき場所で、7th系の音を入れてしまうと、その響きが合わない場合があります。

コードの指定がトライアドの場合、
7度の音には気を付ける。

7th(ここではルート音Cに対するB音なのでM7th)



この辺り、純粋なトライアドに対しては、7度の音はノンコード・トーン寄りに
考えていた方が安全でしょう。

(※譜面にトライアドが指定されていても、「ここは4和音でもOK」と解釈して、
7度まで鳴らして大丈夫な時もあります。)

ちょっと小難しく感じるかもしれませんが、現段階では、単純に、
『トライアドに対しては、7度の音は気を付ける』くらいに思ってください。

この2つのコード表記は、厳密には別物と考える。

(※CM7を弾いてほしいのと、Cのトライアドを弾いてほしいのでは意味が違う)

(※※でも気にせずに弾いてもいい場合もある)

さて、「ノンコード・トーンは、大きく2つのパターンを考える」という話の、
ここまでが1つ目です。

これは「その楽曲のkeyの基準スケール内の音」で考えた場合ですね。
(※CキーならCメジャースケールの構成音内)

もう一つのパターンは、「基準スケール以外の音」のパターンです。

C キーなら C メジャースケールの CDEFGAB 以外の音、12 平均律の全 12 音からダイアトニックスケールの 7 音を引いた、残りの 5 音(C#, D#, F#, G#, A#など)のことですね。

これらの音は、普通に見たらノンコード・トーンっぽいですし、ダイアトニックコードのみの進行で、そのコードが鳴っている上でメロディーなどで経過的にちょろっと出てきた場合、ノンコード・トーンとして見ていいと思います。

※key=C のダイアトニックコードのみの進行で、C メジャースケール外の音が出てきた場合

※key=C時のダイアトニックコード → CM7、Dm7、Em7、FM7、G7、Am7、Bm7(b5)

赤枠のC#音は、Cメジャースケールに無い音で、かつ、C#音が鳴っている時のバックのコード「Am7」(A、C、E、G)に対してもノンコード・トーン

ただ、部分転調の様なアレンジで、その key のダイアトニックコード以外のコードが出てきて、元のキーの基準スケールに含まれない音が出てきたけれども、その時のコードの構成音である場合、その音はコード・トーンです。

※key=C(その楽曲の元々のキー)のダイアトニックコード以外のコードが出てくる進行で、そのコードの上で C メジャースケール外の音が出てきた場合

※key=C時のダイアトニックコード → CM7、Dm7、Em7、FM7、G7、Am7、Bm7(b5)

※2小節目のA7はCキーのダイアトニックコードに無いコード(部分転調の様なアレンジ)

この場合、「A7」の構成音が「A、C#、E、G」なので、C#音はA7にとってはコード・トーン
(※でもCキーの基準スケールであるCメジャースケールからは一時外れている)

♩ = 80

S-Gt

CM7 A7 Dm7 G7

mf

T
A
B

5 5 5 7 7 9 5 8 7 7 5 7 5

と、言う事で、2つ目のパターン、「その楽曲の基準スケール以外の音」が出てきたときはこんな感じで考えます。

ちょっと小難しい解説になってしまいましたが、最初に言ったように、コード・トーン、ノンコード・トーンとは、文字通り、『そのコードのトーン(構成音)か否か』と言うわけですね。

なので、前回学んだ『テンション』は『ノン・コードトーン』になります。

コードトーンじゃないもの(そのコードに対して安定感の薄い(低い)音)をコードに入れるから、「テンション(緊張)」が生まれる、と。

さて、新しい用語を2つ覚えたところで、最後の1つ、

『アヴォイド・ノート(avoid note)』

についても、軽く見ておきましょう。

各単語の意味を見ると、『避ける(avoid)、音、音符(note)』ということで、これもほぼそのままの意味ですが、実際のプレイ時の感覚で言うと、『(ある状況では)鳴らす事(使い方)に注意する音』みたいな感じです。

もう少し具体的には、

**『絶対に鳴らしてはいけない時もあれば、
一定の範囲なら鳴らしても大丈夫な時もある』**

と言ったところでしょうか。

で、このアヴォイド・ノートなんですが、代表的なスケールには0~2音程度(大方1音)含まれていて、『そのスケールから構成されるコードの機能(響き)を阻害する』と言う考えから、設定されています。

なので『(そのコードの邪魔をするので)避ける音』の名の通り、アヴォイド・ノートは、ノン・コードトーンの中のどれかになります。

この辺りはちょっとルールがややこしいので、今は「そういうものがあるんだなー」くらいに思っていてください。

後々、必要な時にやっていきますので。

では、今回は以上です。

新しい3つの用語、

『コードトーン』、『ノンコード・トーン』、『アヴォイド・ノート』

それぞれ覚えておいてくださいね。

今後の解説で出てきますので。

ありがとうございました。

大沼